



南側からの鳥瞰



南面全景



南門



東より正面方向を見る。



# 京都国立博物館 平成知新館

## 選評

敷地は、千年の都・京都の緑多い東山で、西に鴨川、北に方広寺、南に蓮華王院（三十三間堂）の南大門を望む。片山東熊設計のルネサンス様式の本館（竣工：明治二十八年、現在は明治古都館）が前庭越しに正門と煉瓦塀に正対し、東西軸を形成している。平成知新館は出入口を建屋の東端、本館側へと寄せ、方広寺南門の柱遺構を発掘したまさにその位置から蓮華王院の南大門を真南に拝して、往時の社寺配置を彷彿とさせる南北軸を形成している。明治の東西軸と平成の南北軸が京都の都市構造そのままに直交させた遠景となつて、都市性と歴史性を顕現する堂々たる力を持っている。一方、近景は水平に長く伸ばした深い庇と障子を思わせるガラスの和の佇まいが、西洋的な本館との対比を際立たせる。庇は本館のコーニスの高さに揃え、建物の高さを本館

両翼頂部に合わせ主翼天頂の高さよりは低く抑えて、新旧の二棟が相和し全体景観の中に凛とした気品を醸し出している。

十六年という歳月をかけた難度の高い設計を検討するうちに、二十一世紀を迎えて事業目的も自ずと変容し、歴史遺産と豊かな自然環境の継承に止まらず、京都の顔として世界に文化を発信する新時代の「保存と公開」の諸課題に、選択肢を広げ高みを目指して挑むことになった。

第一の課題は、内部環境の均質化と上質化である。風致地区、日影等の関係で地上部を低く抑え建物は地下へと拡張した。地下収蔵庫では地下水止水の徹底と高断熱・高気密による温湿度や空気質の「安定」を実現し、収蔵庫と展示室では床免震と床仕上げを一体化し文化財と鑑賞者の「安心」を、リスクに備える万全な運営体制を構築している。

第二の課題は、観光客等を想定した滞在時間の自由度拡大である。スキップフロアで構成された展示室の中央部分に吹き抜けを設け、

BCS賞は、建築の事業企画・計画・設計・施工、環境とともに、供用開始後1年以上にわたる建築物の運用・維持管理等を含めた総合評価に基づいて選考し、建築主・設計者・施工者の三者を表彰する建築賞です。この賞は、1960年にはじまり2016年で57回を数えます。

< 2016年 第57回 BCS賞受賞作品 > 飯野ビルディング 大手町タワー／大手町の森 京都国立博物館 平成知新館 グランフロント大阪 高志の国文学館 ザ・リッツ・カールトン京都 住田町役場 東京スクエアガーデン 流山市立おたかの森小・中学校、おたかの森センター、こども図書館 日清食品グループ the WAVE 穂の国とよはし芸術劇場 プラット 八幡厚生病院本館 山梨学院大学国際リベラルアーツ学部棟 Ribbon Chapel 龍谷大学 和顔館 [特別賞] 札幌市北3条広場・札幌三井JPビルディング 日本橋室町東地区開発：室町東三井ビルディング、室町古河三井ビルディング、室町ちばぎん三井ビルディング、福徳神社



# 建築主

より 国立博物館としての品格を守る

京都に伝わる多様な文化財を展示・保存するに相応しい、現代を代表する博物館施設を作りたいとの構想から実に20年、一昨年秋に平成知新館が開館してから早2年が経ちます。新時代の「開かれた」博物館を目指し、長い事業期間中に生じた様々な条件変更丁寧に順応していただきながらも、谷口先生の建築の本質は当初から一貫して揺るがず、世界最高水準の施工技術に支えられて、展示保存環境

としての機能性はもとより、洗練と品格を合わせ持つ理想的な施設ができあがりました。本館と共に輪奐（りんかん）美を誇るこの建築には、随所に日本文化の基本的感性が見事に機能しています。展示される作品と伍す力を持ち、また新旧の建物においても引き立て合うことで今や古都の新名所となりました。本賞の名に恥じぬよう、末永く真に良質な維持管理に努めて参ります。



独立行政法人  
国立文化財機構  
京都国立博物館長  
**佐々木丞平**  
Jobei Sasaki

# 設計者

より 敷地環境に呼応する建築



株式会社  
谷口建築設計研究所  
所長  
**谷口吉生**  
Yoshio Taniguchi

敷地周辺には多くの文化遺産と豊かな自然が遺されており、敷地内には明治期に建てられた本館の建築もありました。これらの敷地環境と新しい建築を密接に関係づけるため、博物館の南門、中央部分の庭園、建築の周辺などの設計を並行して行いました。同様に、展示空間と関連して、展示ケースや家具、サインに至るまで意匠統一を行い、建築の内部と外部全体が、国の博物館に適した環境として再整備され

ることを、設計における最も重要な方針としました。文化財の永久保存と、公開展示を両立するため、収蔵庫と展示室を完全に隔離し、自然光を遮断した閉鎖的な空間とする一方、ロビーやホールなどについては、周辺の緑や街並も遠望できる開放的な空間としました。今後も、庭園文化の中心である京都にふさわしい博物館となるよう、庭園を含めた周辺環境全体の整備や保全が必要と考えます。

# 施工者

より 「想い」をかたちに、そして次の100年も

京都国立博物館、谷口先生をはじめとする平成知新館建設に関わる皆様のこの建物への「想い」を共有し、我々施工者は「手間を惜しまず、最高の仕事をする」を合言葉に工事を進めました。今回のBCS賞の受賞に当たっては、合言葉を実践して持てる技術力を十二分に発揮し総合力で対応していただいた協力会社、特に、最高の材料を相手に創意工夫とその技量を如何なく発揮してものづくりに邁進

した職人たちに感謝し、この賞を共有したいと思います。この工事は資材の調達、物性検証から試作、工法開発、現場施工に至るまで、既成の考えにとらわれず一つひとつのプロセスを誠実にこなし造り込んできました。施工に携わった者にとって様々なことを学ばせてくれた建物です。京博の次の100年を象徴する建築であるよう、これからも関わり続けたいと思います。



戸田建設株式会社  
大阪支店 建築工事業部  
工事課 工事長  
(当時作業所長)  
**曾我正志**  
Masashi Soga



1階展示室（彫刻）



1階レストラン



1階グランドロビー

往路復路でステンレスメッシュの簾越しに絵画や大仏の闇に浮かぶ光景を見上げや見下ろしで覗き、来訪者は自分の現在地と順路サインに依存しない自由な順路選択の「確認」が可能である。

第三の課題は、展示と建築の一体化と催事企画の自由度である。LED照明の全面的採用や汎用性を持つ展示ケースはその存在感を透明化し、展示品と鑑賞者間の壁を取り払う。一方、豊かな景観に面しているロビーは、休息と思索の至福の「時間」をもたらすと共に、交流と学習の外部利用の「空間」となって、開かれた運営にさらに深みを与えている。

いずれの課題に対しても、しなやかに対応しながら常に建物全体としての統合性をめざす、建築主・設計者・施工者の三位一体の取り組みが見事な格調と完成度を達成し、一二年の時を超えて、開明期の「動」と、成熟期の「静」の、明治と平成の時空を繋ぐ交歓を実現している。

【選考委員】  
佐々木睦朗・六鹿正治・尾崎勝

計画概要

建築主：(独)国立文化財機構  
京都国立博物館  
国土交通省 近畿地方整備局

設計者：(株)谷口建築設計研究所

施工者：戸田建設(株)

所在地：京都府京都市東山区茶屋町527  
竣工日：平成25年7月31日

敷地面積：53,182㎡  
建築面積：5,568㎡  
延床面積：17,997㎡

階数：地上4階、地下2階  
構造：鉄骨鉄筋コンクリート造